

鶴岡の特色について-----策定委員意見-第2回策定委員会資料-----

※委員へ任意で事前に提出をお願いしたもので、6名の委員から提出があり、当日の協議資料として使用した。

◆「沈潜の風」と「継承の粹」

たとえば、修験道を筆頭にして、論語の素読や酒井家御当主（殿）の存在、在来作物など、事物をひたすら継承する美学（粹）を重視する地域。

同時に、そのような地域の宝がありながら、それを声高に自慢しない気風。一方でそれは地域ブランドのアピール不足の要因でもある。

◆学校（高等学校）の文化部は、合唱、吹奏楽、演劇、郷土芸能、写真、囲碁将棋、文芸、科学、茶道、華道等の分野で活動している。この中で、鶴岡の特色につながる分野は、合唱を中心とした音楽が挙げられる。小・中・高・一般が連携した、市を挙げての音楽イベントの開催により音楽の街「つるおか」を内外にアピールし、音楽にかかわる市民の増加につなげる。（今の音楽祭をさらに充実させる）

また、学習活動として、例えば、本校では総合学科家政科学系列の生徒が鶴岡のシルクを学び、シルクガールズプロジェクトを実施してきたが、この分野も鶴岡の特色につながる分野となっているものと考えている。

今年度の「シルクノチカラ」のように、市の支援により高校生の文化活動、活躍の場が広がっていることは大変ありがたいことである。このような学校で取り組んできていることをベースに鶴岡市の特色として発信できるとよいと考える。

◆鶴岡が北緯 38 度あたりに位置し、東の標高 2,000mほどの出羽山地から 40 kmほど進んだ西側が海拔 0mの海岸線となる範囲にある。このことで、地球上でもごく限られた四季が非常にはっきりとしている土地となっている。その四季によってもたらされる豊かな自然の恵みを生かした食文化、伝統芸能文化などは、年中行事と密接に関係して、鶴岡の精神文化をなしている。学校教育においても、藩校が存在していた歴史を大切に、学ぶことを大事にしている。小学校から高等教育機関までが、一つの市の中に存在していることや、養護学校、高等養護学校といった、障がいを持つ子供も学ぶ場がある。ホストタウンでもドイツのボッチャチームを受け入れているなど、共生社会について市民が考える環境が整ってきている。

◆鶴岡の特色、それは長い年月の間に育生されてきた土地柄、人柄、換言すれば「鶴岡の風（ふう）」であると考えていいのかもしれませんが。教育も産業も経済もすべてその風を基（もと）として発展してきました。その風は気候、風土の他に単にこの土地で生まれ育ってきた人だけによって育生されてきたのではなく、他地域の異なった視座からの意見や活動などの融合によっても「風」が興り、育生されてきたといえるのではないかと思います。

鶴岡の特色（柄・風）の一つとして「学問（教育）を大切にしている文化」（学問<教育>が一番大事であるという意識・学ぼうとする姿勢）があげられます。藩校致道館教育の一部を現在の学校教育に活用したり、歴史的にみれば明治時代の鶴岡にあった奥羽人類学会の活動を走りとして昭和25年以降の山形大学や致道博物館の学術発掘調査、地域的特色をもつ民具民俗調査研究活動、それから戦後まもない頃からの鶴岡市の社会教育活動は他地域にさきがけて行なわれ、その根底には学問、教育が大事であるという意識を多くの市民が持っていたからであり、それが今も綿々として継承されているのではないかと考えます。

◆「鶴岡の特色について」

・文化に触れる、学びを深めることに価値を感じる方が多い。
学び、というキーワードに対しポジティブな印象を持ち、自ら学ぼうとする人が酒田より多いように感じる。

・新しいものに対し初めは様子を伺い、しばらくして後に受け入れる。
新しく参入するものをまずは様子見をする。
しばらくその様子を伺い、自分たちの考えに収まるものか判断してそこから静かに行動を開始しているように私は感じます。

テーマ 鶴岡の特色

一、 稀有の歴史的遺産を数多く持つ町である。

縄文の時代から、深く文化的遺産を多く残してきた地域である。古くは砂川でのサメの歯の化石発見から、縄文文化を伝える岡山遺跡、藤島東堀越で発掘の遺構など、古代遺跡も多い、1400余年の歴史を持つ出羽三山には、自然崇拜を中心とした山岳仏教が、特異の密教文化を今になお伝えている。中世期の武藤氏支配400年、近世期の荘内酒井藩250年、さらに近代から現代まで、一藩の家系が同じ土地に在住して、400年の歴史を刻む地域は、全国的に無い。内部抗争があっても、藩内は平和であり、平和は文化芸術を深化させ、円熟させる。受け継いできた芸能や工芸も、高質な文化芸術を形成している。

二、 農林水産業、中でも農業を基幹産業として発展させてきた歴史を有する町である。

稲の単作地帯として、天恵の沃野を切り拓いてきた鶴岡は、水管理も含め、地域住民の共同作業を通じた精神的一体感と、四季折々に風土の美を護る神仏への尊崇の念も篤く、民俗芸能や四季折々の祭事、それを飾る多彩な食文化などを豊かに残してきた。神仏への畏敬の念は、捧げものとしての酒文化、郷土色豊かな在来野菜や、焼き畑農業などに見る伝統的農法を継承させると共に、より良いものをと絶えず追求し、実現させるイノベーション能力を培わしてきた。「不易流行」の理念をもっとも色濃く残す風土的特性を有する町である。

三、 藩校致道館教育の理念を大切に自学自習・個性尊重の考え方を学び、自発性を重んじ、協働する喜びを市民各自が共有してきた町である。

荻生徂徠の言う「コメは豆にはなれない・豆はコメにはならない、米も豆も共に存在しなければ、生活の総体は構築できない」は、「公平・平等の大切さ」を誤って、皆一色に染め上げてしまうことへの警告である。豆は全国に誇る「だだちゃ豆」に、米は「つや姫・雪若丸」に仕上げる「その道のプロ」を目指す気概を有する町である。全国と同じような色にならなくてもよい鶴岡を大事にする伝統を守る気風が強い。

文化芸術活動でも、鶴岡は個性的であった。昭和の敗戦時に於いても、鶴岡の芸術文化活動は、外部の働きかけと、行政と協働とのコラボで、自発的に鶴岡の風土の特性を生かしたハイレベルの文化芸術活動を自発的に展開してきた。市民の鑑賞レベルは全国的に定評があった。芸術祭は、県芸文協会より早く発足させてきた。「始めたら続ける」継承力と創造性を内発的に豊かに持っている。「押し付けられる」ことを嫌い、愚直なまで努力する精進を好む気風がある。

四、時代の転換期をいつも芸術文化の振興で乗り越えてきた町である。

昭和11年発足の「庄内松柏会」は、耕学を一体化し、具体的作業とそれを支え発展させる学びを精神的な強さにまで拡大して実践してきた。庄内農民の「技」と「心」を共有する拠点であった。この学びは月例的に引き継がれ、現代に及び、農学部、農業改良普及所などと連携し、ドローンを駆使したスマートアグリにまで幅を広げて、生産性を保持する文化を形成している。右手に経書、左手に鎌の文化である。全国に誇る「銘酒品評会」での入賞も「ユネスコ食文化創造都市」の国内唯一の認証を形成する一助になった。歴史と文化と産業・観光など人間の創造力を複合する「ガストロノミー」の概念は、庄内のこれまでの在り方に、国際的な言葉が与えられたものと言うべきで、地域での地道な取組みが、世界的な承認を受けたというべきである。同じく「合唱のまち鶴岡」も、菅原喜兵衛たちの、大戦後の精神的復興を音楽に賭けた情熱に拠っている。各地に残る民俗芸能も、「山戸能」「黒川能」「高寺八講」など、神にささげる神事能から獅子舞まで、みなこの地の豊かさを願う民情を、時の為政者が保護育成してきたものである。「文化都市鶴岡」の内実を確かなものにするのは、市民ひとりひとりの活動と、市民が集い感動を共有する活動と、それらすべてを支援する行政の一体化した動きがあって形成されてきたものである。

五、戦火にも遭わず、貴重な歴史的文化が遺産として残されている町である。

長い平和の中で、戊辰の役でも、太平洋戦争での空爆でも消失することなく残った遺産が多くある。しかし今、壊滅的な破壊に出合っている町でもある。生活様式の変化で、貴重な古文書も、貴重であることを認識されないままに、あるいは認識されても収容する場所がないために、消滅させられている。収蔵庫の確保や、かつて市内に多くあった「料亭」で代替えされてきた「和の文化」活動を保障する場の整備が進まず、名目だけの浅い文化都市となり、伝統と進取を誇りにしてきたレベルを低下させている。

六、新しい文化の誕生に寛容であり、異文化発祥にも包容力豊かな町であった。

「吉統舞踊学園」として東北はもちろん全国でも認知された現代舞踊は、お寺の本堂で、タイツで踊ることから始まった。藤沢周平の映画撮影は、松が岡の開墾場の畑のセットから始まった。先端研のクモの糸は、居酒屋での飲み会から始まった。酒祭りは人間を入れることを嫌った酒蔵から始まった。始まったらさまざまな文化を呼び寄せた。「宝谷のそば祭り」や、「朝日のワインまつり」、「おいやさ祭り」、「赤川花火大会」は若くやる気ある市民が、精一杯に活躍し、定着させ、全国有数のそれぞれの上をゆくレベルにまで成長させた。「荘銀タクト鶴岡」も市民協働のもまちづくりの拠点に成長させ、ここに住む若者が自発的に文化芸術活動を展開し、青春の誇りを生み出す活動を展開できるよう考えていく。市民と行政と産学官金協働の賑わい創出をここに育む市民力を鶴岡は持っている。ストリートダンスも世界の文化となっている。